

# 統廃合せず、合同(G)授業で 対応する小中学校

—宮崎・五ヶ瀬町—

内山雄平

いま、新潟県では、平成の大合併にともない各市町村で小中学校の統廃合が計画され、実施されつつある(詳しくは「にいがたの教育情報」100号参照)が、小さな学校を統廃合せずに、それぞれの地域の学校を存続しながら、子どもの教育をすすめている宮崎県・五ヶ瀬町の例を紹介したい。

五ヶ瀬町は、九州のほぼ中央、宮崎県の北西部に位置し、標高が500〜700メートルである。森林面積が全体の88・4%を占め、可住地(田・畑・宅地)は5・4%と山峡の町である。森林地帯という特色を生かし、「フォレストピア学習」と銘打って、1994年全国初の中等教育学校を設立して話題となった。

現在、小学校は4校(上組小1人、三ヶ所小100

人、坂本小49人、鞍岡小60人)、中学校は2校(三ヶ所中93人、鞍岡中27人)で1学年1学級である。「合同(G)授業」とはこれら小中学校の各学年の児童数・生徒数を合わせて、町内学校の1学年と見立て、各教科、各学年の学習内容ごとに、最適な児童生徒数で授業を展開する方法である。問題はいかに最適少人数授業に必要とする教員を確保するかである。

例えば、現在、小学校1年生は4つの学校で、各10人、25人、7人、10人の授業を4人の教師が担当しているが、これを町内の学年とみると32人の児童に教師が4人いることになり、一人当たり児童数は最小13人となる。同じく2年生は教師一人当たり9・7人となるので、教科内容が10人を最適の単元とすれば、残り

の教師3人は、1年生に廻れる。その場合1年生の教師一人当たりの児童数は7・4人(52・7)まで受け持つことが可能となる。これを全学年の全教科で最適人数を求め、学習する単元の組み合わせを変えることによって、現有定数(統合によって教員定数を減らすのではなく)を生かした本来の少人数授業をすすめることができる。そのため、町立学校を一つの学校として機能させるため、町内小学校4校、中学校2校が週時程・校時程を揃えている。

町内の学校が合同して行う「G授業」は、08年5月から実施。小学校6年と中学1年を集めた小中一貫授業も取り入れている。学校間の児童生徒の輸送は、町内のスクールバスを利用する。

学校の分掌は、大規模校のような分掌を組織化せず、基本的に「確かな学力」「豊かな学力」「教育支援」の3部体制とした。その上で、小・中学校とも年間の授業カリキュラムを一つにし、作成上の省力化を図ると同時に、「五ヶ瀬教育ビジョン」を中心に、学校目標・重点事項の共通化、目指す学校像・子ども像を目標として、教師が気持ちを一つに教育をすすめる基盤となっている。

新学習指導要領の実施に向けて、小学校1学年から中学校3学年までの9ヶ年の一貫義務教育カリキュラムの作成を行っており、基礎定着期(小1〜4、学習規律や基礎的・基本的な知識や技能を繰り返し指導し、習熟を図る)、基礎活用期(小5〜中1、身につけた基礎的・基本的な知識や技能を活用し、論理的な思考や表現力を一層育成する)、探求期(中2〜3、身につけた知識や技能を発展させ、自ら課題を見つけ、それを解決する力を育成する)と設定し、発達段階に応じた指導をすすめるという。

また、地域の人材を学校にボランティア(授業・学習活動、学校行事、登下校の安全、環境整備のサポート)としてお願いするだけでなく、学校も地域に積極的に関わろうと、学校支援地域本部を立ち上げた。例えば、地域住民へのパソコン講座の開設、郷土料理の講習会用に学校施設を開放している。加えて学校給食の高齢者への給食サービス等を考えているという。

「学校を地域コミュニティの核に」を合い言葉に取り組んできたこうしたとりくみを紹介する21年度「教育ビジョン」全体研究会・公開授業(21年11月27日)が開かれた。参加者の声として「小規模校では集

団学習ができず、統廃合で適正化を図るしかなかった。五ヶ瀬のとおりくみは教育的マイナスを逆に生かそうとする新しい着想」、「中央教育審議会では、統廃合の在り方について議論している最中、統廃合のアンチテーゼともいえるG授業は潜在的なインパクトが強く、今後の展開を注意深く見ておく必要がある（前川大臣官房審議官）」としている（『宮崎日日新聞』09年12月10日）。

付記 この稿は「五ヶ瀬教育ビジョン全体研究会のしおり」等をもとに作成した。

（うちやま ゆうへい・研究所事務局長）



## 閉校式のあいさつから（2）

学校の玄関にひと足入れれば、木のぬくもりの校舎のすばらしさは、この校舎が、いかに多くの子どもたちを見守ってきたかという息吹を感じさせてくれます。以前、都会の方が西三川小学校の玄関に入った途端、立ち止まり、「これが学校だ」と呟き「校舎の玄関に入っただけで、この学校のよさが分かる」と語っていましたがおせじではなく、本当にそうなんではないでしょうか。

この学校は、まぎれもなくこの地域と、そこに学ぶ子どもたち、そして子どもたちを支えた先生方の歴史の積み重ねの結果として、学校と地域、子どもたちの輝きをつくってきました。

閉校記念誌に校長先生が寄せてくれた回想文の中に「冷凍食品を一つも使わない手作りの給食も素晴らしいかった」との言葉がありました。まさに子どもたち、地域、保護者、先生方の手作りで歴史を重ねてきた学校であります。

（76頁へつづく）